發話の結束性を持たせる表現の習得

―技術研修生の接續詞習得の過程から―

袴田麻里

＜要旨＞

初級レベルの學習者の發話に結束性を持たせる手段の使用狀況を調査した。被驗者は靜岡縣の企業で1年間研修を受けたスリランカ人技術研修生2名で、研修期間中、1ヶ月目、7ヶ月目、12ヶ月目にOPI（Oral Proficiency Interview）を實施し、分析資料とした。

その結果、來日前に學習經驗のなかったRRは、1ヶ月目のOPIでは結束性を持たせる手段の使用が見られなかったが、7ヶ月目にはいろいろな用法の接續詞を多用していることが分かった。SSも種類は限られるが、接續詞の使用を增やしている。このような接續詞の使用は、短い文でまとまりのある發話を形成する場合に有効な手段だと言える。學習者2人は限られた日本語能力のなかで誤用を引き起こしながらも、接續詞を驅使して意識的に結束性を持たせる工夫をしていたと言える。

＜キーワード＞　研修生、初級學習者、OPI、結束性、接續詞

1　はじめに

日本に滯在する日本語學習者の多くは、日本語學習を始めるにあたり、まず口頭表現能力の習得を希望する。つまり、自分が話したいこと／話さなければならないことを話せるようになりたいということである。しかしながら、ただ發話できればいいというものではない。同じ情報量ならば、より分かりやすく効率よく傳達できたほうが聞き手の理解を促しやすい。これは、初級レベルであっても、上級レベルであっても變わることはない。

以下の＜發話例１＞は、初級の學習者の發話例である。

＜發話例１＞

A:　じゃ、そのね、日本の友達はどんな人ですか? ちょっと私、會ったことがありませんから、ちょっと顔とか、いろいろ教えてください。

B:　やさしい人です。目や、目が小さい。中國人、目がとても小さいね。小さい、髪が、時々長い人もいますね。短い人もいます。白い、白色（しろいろ）ね、白色（しろいろ）。

A:　何が白いですか？

B:　顔、白色（しろいろ）ね。

A:　あー、そうですか。

質問者Aは、學習者Bの日本人の友人の一人について尋ねているのだが、Bは、いろいろな友人について話している。これは、Bにある人物を十分に説明するだけの語彙や表現

がまだ不足しているという理由も考えられる。しかし、ここで説明を分かりにくくしているのは、日本人の友人の説明から、突然中國人の説明になり、そして、突然複數の人の説明になるためである。この時、該當する中國人は1名であったので、その後の複數人の説明は、全く別の人たちのことである。このように、發話から得られた以外の知識があれば聞き手の理解はそれほど損なわれないが、背景知識、關連知識がない場合、聞き手の混亂を招く分かりにくい發話となる。＜發話例１＞のような理解に障害を生じさせる一連の發話は、初級の段階では仕方がないものなのだろうか。

筆者は靜岡縣の企業で1年間技術研修を受けたスリランカ人研修生に對して、研修期間中に3回OPI（Oral Proficiency Interview）<注1>を實施し、發話能力を測定した。本稿では、そのデータをもとに、技術研修生（以下「研修生」）が結束性を高める手段を習得する過程を明らかにしたい。

2　本論文の調査の目的

現在、多くの日本語教育現場では、初級レベルの指導にあたって、構造シラバスにのっとった指導が行われている。構造シラバスには、構造的に難易度の低い項目から順に學習を進めることができるという長所がある。しかし、多くの場合、時間や人數といったさまざまな制約により、學習項目の導入と練習に終始し、發話全體、あるいは作文全體のまとまり、つまり結束性に配慮した指導まで行えないのが現狀である。その結果、當該學習項目を用いた「文」はできるようになるが、結束性のある發話／作文を苦手とする學習者が生み出される。

結束性とは、テクスト内の文や節の間の表層的なつながりのことである。文の構造がパラグラフなどの單位やテクスト全體の進行とどのように關連するかを明示することによって、分かりやすい傳達を實現できる。

結束性を持たせるには、いくつかの方法がある。例えば、發生時間順に竝べたり、原因―結果の順に竝べたりすることによる方法である。同じ語を繰り返したり、意味的に關連する語を使用したりする語彙的な手段もある。同じ語の繰り返しは、どのレベルでも可能だろうが、意味的に關連する語の使用や言い換えは、ある程度語彙が增えないと難しいと思われる。文法的な手段としては、接續詞・接續助詞、「は」「も」の使い分け、置換・省略などがある。この文法的な手段は、語彙的手段と違い、初級から指導が可能な項目があると思われる。

初級段階であっても、まとまりのある發話が可能なのではないか。本論文では、初級學習者が結束性を高める手段を習得する過程を調査し、まとまりのある發話生成に向けて、指導の可能性を考察する。本稿では、特に、先に述べた結束性を高める手段のうち、初級

教科書の會話や練習問題で使用されていることが多く、語そのものによって結束性を明示的に示す接續詞を取り上げる。

3　先行研究について

接續詞には、文と文とが續いていること、情報の連續性があることを明示的に示す役割がある。

栃木(1994、1995)は、日本語母語話者と中級學習者の發話を比較している。その結果、學習者は日本語話者より、接續助詞、接續詞ともに種類が少なかったり、使用に偏りがあったりすると報告している。しかしながら、學習者に母語話者が用いた接續表現についての知識がないわけではなく、知識としては知っていても使えないために短い文を羅列したり、逆に特定の接續表現を使い過ぎたりした結果、不連續な分かりにくい文を産出したと考察している。

土肥(1996、1998)も日本語母語話者と中級學習者の發話を比較した結果、學習者の接續表現（接續助詞、接續詞）は語句を一部變形させた異形が多く、質的に變化に富んでいるとはいえないこと、また、母語話者には順接の論理關係を表す「～たら」「そしたら」「～と」の使用が多く、學習者には、時間關係を表す「～から」「～あとで」「それから」、逆說の「でも」の使用が目立ったとしている。このような違いは、母語話者が說明に物語性を付そうとしているのに對し、接續表現を使いこなせない學習者は客觀的に進行を述べていることが原因であろうと考察している。

增田（2000）は、學習者が接續表現（接續助詞、接續詞）だけを用いて因果關係をつないでいくのに對し、母語話者は連體修飾節も用いていることを指摘している。學習者が使用する接續表現は類似表現の繰り返しが多い。母語話者は、機能的に異なる接續表現の使用以外に、形式上は接續表現と全く異なる連體修飾節で談話をまとめ、學習者に見られるような類似表現の使用を避けていると報告している。

袴田（2001）では、中級學習者の時間的說明を含む發話における接續表現（接續助詞、接續詞）の使用狀況調査を行い、使用が最も多いのは「あとで」であるが、誤用もまた多いと報告している。これは、それ自體に意味を持つ「あとで」のほうが「それから」よりも概念的に理解しやすいためであると推測している。

以上の先行研究から、1）日本語學習者は日本語母語話者に比べ、接續表現の使用回數はそん色ないものの種類に偏りがあること、2）學習者は接續表現の使用に終始し、連體修飾をほとんど使用していないことが分かる。しかし、これらの研究で扱っているのは中級學習者の事例である。初級學習者であっても、結束性を意識した發話をしている可能性

があるが、初級學習者の習得狀況は明らかではない。

4　調査の概要

4.1. 被驗者

被驗者は、スリランカ人研修生2名（「SS」「RR」）である。靜岡縣K市の電子機器關連の企業で、2000年11月～2001年11月の1年間、光ファイバー製造技術、保守操作、品質管理について研修を受けた。コース終了後、SS、RRへ依頼したアンケートによると、研修中に使用された言語は英語と日本語であり、うち日本語が使用された割合はSSが70％、RRが25％であった。SSは來日前に日本語學習經驗（3ヶ月弱）があったが、RRはまったくなかった。

研修中の日本語教育は、就業時間後に週4時間（2時間×2日）、合計192時間であった。使用した主教材は、『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』（30課まで）で、教科書の提示順序に従い、1課につき4～6時間かけて導入、練習を行った。その他、適宜聽解教材を用いた。9ヶ月目からは教科書を離れ、歸國前プレゼンテーション（光ファイバー製造工程について）の準備を行った。

4.2. 分析資料

學習開始1ヶ月目、7ヶ月目、12ヶ月目にOPIを實施し、錄音した。錄音したインタビューは、JCHAT<注2>の形式で文字化し、分析資料とした。煩雜さを避けるため、フィラー「あー」などは本稿では記述していない。

被驗者の發話は「*SS」「*RR」で表し、その後ろの數字はインタビューの回數を示す（「*SS1」＝被驗者SSの1回目のインタビューにおける發話）。インタビューは回ごとに異なる面接者によって行われたが、一律「*TES」とする<注3>。

上記資料から接續表現部分だけを抜き出して、使用回數、正用回數、誤用回數を調査した。TESの發話によって結束を促される場合もあるため、TESの發話に「それから？」「どうしてですか」などが含まれている場合のSS、RRの發話＜發話例２＞は、分析對象からは除外した。また、今回は、複數の文のまとまりと關連する項目の調査を目的としているため、複文を構成する接續助詞や、文中で接續助詞の代用として使用された接續詞＜發話例３＞は參考とするに留めた。

＜發話例２＞
*TES:　うん、で、何をしましたか？
*SS3:　寫眞を取りました。
*TES:　それから？
*SS3:　それから、豊川近くに買い物しました。
*TES:　ふーん、そうですか。

＜發話例３＞
*TES:　じゃ、あのー、バレーボールのあとでみんなでなにかしますか ？
*SS2:　バレーボールあとで、みんなといっしょに寮へ歸ります。あとで、晝ご 飯を 食べて
　　體がちょっと大變から、だから、寢ています。
*TES:　あー、そうですか 。

5　結果と考察

5.1. OPIの判定と發話の長さ

表１：レベル判定と平均發話長

	1ヶ月目	7ヶ月目	12ヶ月目
SS	初級－上	中級－下	中級－下
平均發話長（延べ語數／發話數）	3.186語	4.637語	3.995語
RR	初級－中	中級－下	中級－下
平均發話長（延べ語數／發話數）	2.681語	4.841語	4.055語

表1は、被驗者2名の發話能力を示したものである。どちらの研修生も能力が伸びていることが分かるが、7ヶ月目から12ヶ月目にかけて伸びがない。これについては、二つの理由が考えられる。一つは、先に述べたように、9ヶ月目からプレゼンテーションの準備を始めたことである。その後、文法や會話等、9ヶ月間やってきた學習とは全く異なる活動となったため、口頭能力の伸びが滯ったと思われる。もう一つの理由は、9ヶ月目の指導講師の交替である。講師交替がスムーズに行われなかったことが、SS、RRの日本語習得を妨げた可能性がある。

5.2. 接續詞の使用

SS、RRが使用した接續詞をまとめたものが、表２、表３である。また、接續詞の使用がほとんどない1ヶ月目を除き、7ヶ月目と12ヶ月目の正用、誤用の割合を示したのか圖１、圖２である。

表２：SSの使用狀況

			接續詞（回數）									
			順次動　作		追加		條件		理由		逆接	
		話題	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用
SS1	1	休憩		あとで(1)								
	2	仕事內容										
	3	料理										
	合計	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
SS2	1	道順	それから(2)	それに(2)				それに(3)				
	2	所持品										
	3	普段の生活	それから(7)							それに(1)		
	4	調理法		あとで(5)								
	5	日本料理									でも(1)	
	6	バレーボール規則		あとで(2)	それから(1)			あとで(1)			でも(1)	
	合計	36	9	9	1	0	0	4	0	1	2	0
SS3	1	仕事內容									でも(1)	
	2	ノート										
	3	ゴミ屋									でも(1)	
	4	ジーンズ							から(1)		でも(1)	
	5	故郷			それから(1)					でも(1)		
	6	行った所										
	7	豊川の土産										
	8	訪問者										
	9	仕事內容										
	合計	16	0	0	1	0	0	0	1	1	3	0

KCI

図１:SSの正用、誤用の割合（%）

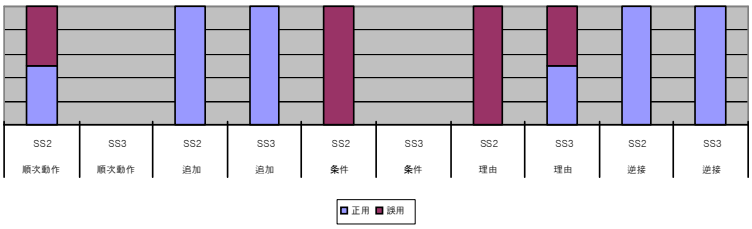
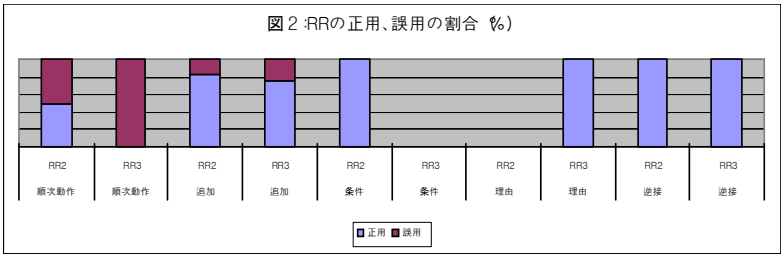


表３：RRの使用状況

KCI

			接續詞（回數）									
			順次動　作		追加		條件		理由		逆接	
		話題	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用
RR1	1	故郷										
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RR2	1	道順	それから(1)	あとで(1)			すると(1)				でも(1)	
	2	映畫			それに(2)							
	4	スリランカの食べ物									でも(1)	
	5	調理法		あとで(2)							でも(1)	
	7	好物										
	8	メニュー										
	9	名所			それに(1)							
	10	普段の生活	それから(2)									
	11	パーティー		あとで(1)								
	12	松野さんa										
	13	友達				でも(1)						
	14	松野さんb			それに(2)						でも(2) けど(1)	
	15	約束變更									でも(2)	
	16	仕事內容	あとで(1)									
	合計	23	4	4	5	1	1	0	0	0	8	0
RR3	1	昨日と一昨日				あとで(1)			だから(2)		でも(1)	
	2	行った所			それから(1)							
	3	豊田で		あとで(1)								
	4	トヨタ車									でも(1)	
	5	訪問者			それから(2)							
	6	仕事內容									でも(1)	
	合計	10	0	1	3	1	0	0	2	0	3	0

KCI



5.2.1. 1ヶ月目

1ヶ月目のOPIでは、來日前に日本語學習經驗があったSSに「あとで」が觀察されたにすぎない。日本語學習經驗がなかったRRには、接續詞の使用が見られなかった。しかし、兩者とも7ヶ月目には大きな變化を見せている。これは、1ヶ月目のインタビューでは、まだ日本語での發話能力がそれほど高くなく、一問一答で進んでいったためである＜發話例4＞。

＜發話例４＞
*TES:　今日は何をしましたか。
*SS1:　今日は、下にtest roomの中にassemblyします。
*TES:　あ、そうですか。今日だけですか。
*SS1:　はい。
*TES:　先週も？
*SS1:　先週もです。
*TES:　簡單ですか。
*SS1:　たぶん、簡單です。
*TES:　そうですか。

SSの發話は、TESの質問に答えるかたちで促されていることが分かる。この段階では、話の展開はTESの質問にゆだねられており、學習者は最低限の情報を傳えることで精一杯である。當然、學習者の注意は文と文との結束性には向かない。しかし、學習が進んだ7ヶ月目、12ヶ月目には、SSにもRRにも數種類の接續詞の使用が觀察された。

5.2.2. 7ヶ月目

表2、表3に掲げた接續詞はすべて、7ヶ月目のOPI實施以前に導入、練習された。

正用と誤用が入り交じっているのは、順次動作を示すための接續詞であった。使用回數も多いが、誤用も多い。「それから」を使用すべきところで、＜發話例５＞に示したように「あとで」を使用しており、袴田（2001）と同樣の傾向を見せている。また、追加の「それに」を用いた誤用も觀察された＜發話例６＞。

＜發話例５＞
*TES:　あの、これからRRさん、何をするんですか？
*RR2:　今、パソコン、レポートを書きます。あとで、Ｅメールで送ります。
*TES:　忙しいですね。

＜發話例６＞
*SEN:　ちょっと分かりません、日本語でちょっと分かりません。英語でpieceです。それは 3センチぐらい長いと、２ミリぐらい太いpieces１分２分。それに、包丁でいろ切ります。

使用が安定していたのは、逆接の接續詞である。1ヶ月目では使用が観察されていないが、7ヶ月目には正確に使用している。使用が観察されたのは、ほとんど「でも」だが、誤用は少ない＜發話例７＞。

＜發話例７＞
*RR2:　スリランカの食べ物は、とても辛いです。全部とても辛いです。でも、飲み物は全部甘いです。

次に使用が多かったのは、追加を表す接續詞であった。追加の接續詞「それに」は「そして」に代わって逆接の接續詞「でも」と同時期に、追加の意味の「それから」は、動詞の順次動作の後に導入された。「でも」の使用状況と同様、誤用よりも正用が多い＜發話例８＞。

＜發話例８＞
*TES:　はい、じゃ、月曜日から木曜日はどうして見ないんですか？
*RR2:　忙しいですから。
*TES:　勉强もありますね。
*RR2:　はい、そうです。それに、私たち、寮、中に毎日（食事を）作ります。

使用頻度が低かったのは條件を表す接續詞であった。「そうすると」は、テ形（～てください）とともに導入されたが、RR2の「すると」の使用が観察されただけにとどまった＜發話例９＞。しかし、なにか接續詞を使わなければならないという意識はあるらしく、SSは「それに」「あとで」を挿入し、誤用となってしまった＜發話例１０＞。このような使用は、傳達だけで精一杯だった1ヶ月目では見られなかったものである。

＜發話例９＞
*TES:　ここからどうやって寮へ行きますか？

*RR2:　會社から道へまっすぐまっすぐ。あとで、一つ目の角へ、右に曲がります。それから、まっすぐ行きます。ガスリンステーションの、近く、信號、信號まっすぐ行きます。ガスリンステーションから近く、駐車場あります。駐車場の前に、寮、私の寮、すると私の寮です。

＜發話例１０＞
*TES:　じゃ、ここからどうやって行きますか？ ちょっと教えてください。
*SS2:　ここから、會社の前に門の右に右に曲がります。それから、まっすぐ行きます。それから、2番の角の左に曲がります。それに、ガソリンステーション、右にあります。

豫想外に使用が少なかったのは、理由を表す接續詞であった。RRには使用が觀察されず、SSに1回、それも誤用が觀察されたのみである＜發話例１１＞。ここでも、SSには何か接續詞を使わなければならないという意識があるらしいことがうかがえる。

＜發話例１１＞
*SS2:　月曜日から金曜日まで食堂で、ごはんを食べます。休みに時に、食堂で、ごはんは作りません。それに、私は部屋の中に自分で食べ物を作ります。

5.2.3. １２ヶ月目

順次動作は、使用頻度が低くなっている。7ヶ月目にも12ヶ月目にも順次動作の説明を求める質問があるにもかかわらず、RRは「あとで」の使用が誤用となっており＜發話例１２＞、SSは使用すらしていない。TESからの「それから」という問いかけがあって初めて、「それから」を使用している＜發話例1３＞。

＜發話例１２＞
*TES:　毎日レポートを書きますか？
*RR3:　毎日じゃない。先週、先週、あとで來週、今週、金曜日でレポート書きます。

＜發話例１３＞
*TES:　豊川で何をしましたか？
*SS3:　豊川寫眞を撮りました。これ [= 柏手を打つ仕種] なんという？
*TES:　うん、これ [= 柏手を打つ仕種] しました。
*SS3:　これ [= 柏手を打つ仕種] しました。
*TES:　うんうんうんうんうん。それから？
*SS3:　それから、豊川近くに買い物しました。

12ヶ月目になっても、逆接と追加の接續詞の使用は安定している。特に、逆接の接續詞

は、使用回數においても、正確さにおいても、他の接續詞とは異なっている。追加の接續詞は、7ヶ月目の「それに」「それから」から「それから」だけの使用となった<發話例１４>。また、追加に「あとで」を用いる誤用も觀察された。

<發話例１４>
*TES:　何が同じじゃないですか？
*SS3:　K市のより、ランカの町は車と車とバスとたくしゃんないです。バスは毎日遅いです。
　　それから、時々バスは夜 8時 あとないです。

7ヶ月目に使用頻度が低かった條件を表す接續詞は、12ヶ月目では觀察されなくなってしまっている。また、RRは理由の接續詞の使用が觀察されるようになった<發話例１５>。SSは、7ヶ月目と違い正用も觀察されたが、「から」という完全な形ではないものもある。また、7ヶ月目同様、全く意味の異なる接續詞を使用している。

<發話例１５>
*TES:　昨日と一昨日はバレーボールしましたか？
*RR3:　バレーボールしませんでした。でも、１０人歸ります、女の子スリランカへ歸りました。
　　だからしませんです。

5.2.4. 考察

7ヶ月目で最も多くの使用が觀察されたのは、順次動作を示す接續詞であった。このような使用回數の多さには、二つの理由が考えられる。一つは、話題の設定が影響を與えた可能性である。仕事の內容、道順說明、行った所など、時系列に沿って話す話題が多かったため、このような偏りが出たと考えられる。次に考えられるのは、敍述の容易さである。平高（1991）は、ヨーロッパ諸國における外國人勞働者の自然習得による第二言語習得の分析を行い、その結果から、事柄の時間關係を表すために最も顯著に用いられるのは、自然の順序に從って事柄をただ羅列していく方法だと述べている。學習の初期段階にある學習者には、自然の順序に從って事柄をただ羅列していく方法が簡單であるため、時間の經過を表す表現の使用が多くなったと考えられる。類似した話題で話した1ヶ月目では、ほとんど接續詞を使用していなかったことを考えると、飛躍的な變化だと言える。しかしながら、單に事柄の羅列によっても時系列を示すことができるため、日本語能力が伸びていない12ヶ月目には、使用が激減したものと思われる。

順次動作を示すための接續詞は、使用回數も多いが誤用も多い。特に初期に導入され、その後頻繁に練習で用いられた「それから」を、指導のなかった「あとで」で代用する誤

用が多い。袴田（2001）が推測したように、それ自體に意味を持つ「あとで」のほうが「それから」よりも概念的に理解しやすいため、「あとで」の使用頻度が高くなったのだと思われる。

順次動作と追加の接續詞の混同は、兩研修生に見られる。SSは、7ヶ月目に「それに」を順次動作の接續詞として用いていた＜發話例６＞。RRは、7ヶ月目に「それから」を使用していないが、12ヶ月目に「それから」と「あとで」を使用している。「それから」が、順次動作、追加のどちらにも使用可能であることから、このような混同が發生したと考えられる。

逆接の接續詞「でも」は、學習の初期の段階で導入されている。そのため、習得も早かったと思われる。また、意味が理解しやすい上、順次動作の「それから」「あとで」のように、意味的に類似した語がないことも、誤用を少なくしたと考えられる。學習期間が長くなっても、誤用が現れないことから、逆接の接續詞「でも」は、SS、RRにとって早期に習得できる、容易な接續詞あったと言えるだろう。

追加と逆接の接續詞に關しては、初期に導入された項目のほうが、定着が進んだ結果と言える。しかし、＜發話例５＞ように、導入を行った「それから」より、行っていない「あとで」の使用が頻繁に觀察されたことから、導入の有無や導入時期が、すべての接續詞の習得に影響を與えるとは言えない結果となった。

表４：複文の使用狀況（回）

	～て	～てから	(理由)から	～あとで	～たら	～とき	～が・けど
SS1	1	0	0	1	0	0	0
SS2	15	0	3	5	3	0	0
SS3	0	0	3	0	1	1	1
RR1	0	0	0	0	0	0	0
RR2	11	1	4	0	0	0	1
RR3	0	0	2	0	0	0	0

理由を表す接續詞、條件を表す接續詞の使用頻度が低かったのは、「（理由）から」＜發話例１６＞、「（條件）たら」＜發話例１７＞の使用とも關係があると思われる。表２、表３で擧げた項目が複文で發話された頻度を表４にまとめた。理由と條件については、文と文を接續詞でつなぐよりも、複文で表現することが多かった。逆接の場合と反對の現象である。ただし、活用させず、單に「たら」または「あったら」を付加しているに過ぎない＜發話例１８＞。

＜發話例１６＞
*TES:　あ、そうですか、1人ですか。じゃ、ちょっと寂しくないですか？

*SS2:　私の部屋の右と左に、4人いましたから、ちょっと寂しくないです。

＜發話例１７＞
*SS2:　でも、入れませんでしたら、右にグループにマークあります。

＜發話例１８＞
*SS3:　お寺前に、きれいなきれいな、メモリーズあります、シヒヤタ。
*TES:　なんでしょう。
*SS3:　それは豊川、人が豊川に行く行きますあったら、それは買います。

理由は「から」を付加するだけの操作だが、條件はタ形への活用が必要になる。そのため、單に「たら」「あったら」の付加に留まったと考えられる。しかし、逆接も理由の「～から」同様、「～が」を付加するだけにもかかわらず、「でも」の使用のほうが多い。また、7ヶ月目における順次動作のテ形の使用頻度の高さを考えると、活用の複雑さは使用頻度に影響を與えているわけではないようである。研修生はなんらかの基準をもって、接續詞を使用するのか、複文にするのかを決定していると推測される。

6　まとめ

1ヶ月目のOPIでは、結束性を持たせる手段の使用がほとんど見られなかった研修生SSとRRは、7ヶ月目には、使用した種類は限られているものの、いろいろな用法の接續詞を多用していることが分かった。

SS、RRが1ヶ月目と7ヶ月目の間に飛躍的に接續詞の使用を増加させたことから、接續詞は指導しなければ、出現が遅れた可能性があると言える。しかしながら、12ヶ月目の使用狀況から逆接の「でも」以外は、指導の有無が習得の促進と關連があるとは言えない結果となった。また、理由と條件に關しては、接續詞を用いて文と文をつなぐ方法よりも、少々文が長くなっても複文を生成を好む傾向が見られた。

今回の調査は、對象が2名であり、一般化を目指すものではない。しかし、2名の研修生は限られた日本語能力のなかで誤用を引き起こしながらも、意識的に結束性を持たせる工夫をしていたと言える。このような接續詞の使用は、短い文でまとまりのある發話を形成する場合に有効な手段だと言える。特に、複文導入前の學習者に對する接續詞の指導は、一文一文は短くとも、結束性に配慮した發話を可能にする。同時に複文への橋渡し的役割も期待できるであろう。

複數の文にまとまりを持たせるためには、結束性を考慮した談話展開が必要である。當

然、複數の文を用いて、長く話したり書いたりしなければ、結束性に考慮する必要はない。そのため、まだ日本語能力が高くない初級學習者には必要ないと考えることもできるだろう。しかし、成人日本語學習者の場合、母語では結束性のある談話展開をしているはずであり、たとえ初級段階であっても、まとまりのある日本語でコミュニケーションできるよう、指導するべきだと考える。

＜注１＞ACTFL口頭能力インタビュー試驗。言語運用能力を總合的に測定する。判定基準には 4つの主要な言語運用能力レベル（超級、上級、中級、初級）がある。超級以外の主要レベルは、さらにその枠内で「－上」「－中」「－下」という下位レベルに細分化される（牧野1999）。

＜注２＞會話的相互作用のトランスクリプトをコンピュータ・ファイルとして作成するフォーマット・システム、Japanese Codes for the Human Analysis of Transcriptsの略。(白井・宮田・中 1998）。

＜注３＞ＯＰＩにおいては、同一の總合基準に照準を合わせるために、規定された構成を用いて評價を行う。よって、ＯＰＩで得られた各發話サンプルは、インタビュー内のタスクは違ってもタスクの型は同じであると言え、各ＯＰＩ間の比較が可能になる。つまり、テスターに關係なくレベルの判定がなされるため、本調査では一律「*TES」とした。（牧野1999）

參考文獻

市川保子(2000)『續・日本語誤用例文小辭典』凡人社

白井英俊・宮田Susanne・中則夫(1998)『CHILDES Manual for Japanese』改訂版, The JCHAT Project

栃木由香(1994)「日本語の話しことばにおける接續と指示の表現－日本語中級學習者の發話分析に向けて」『筑波大學留學生センター日本語教育論集』9號, pp.103-118, 筑波大學留學生センター

_____(1995)「日本語中級學習者の話しことばのテクストの型－接續表現の使用を中心に」『筑波大學留學生センター日本語教育論集』10號, pp.79-93, 筑波大學留學生センター

土肥治美(1996)「談話の接續表現」『日本語研修コース修了生追跡調査報告書２』（編）日本語研修生追跡プロジェクトチーム, pp.161-169, 名古屋大學留學生センター

_____(1998)「談話の構成－マンガを見て説明する」『研究留學生に見られる日本語發話能力の變化と日本語使用環境に關する基礎的研究（日本語研修コース修了生追跡調査報告書３）』（編）日本語研修生追跡プロジェクトチーム, pp.125-139, 名古屋大學留學生センター

袴田麻里(2001)「時間的説明を含む發話における接續表現－「あとで」を中心に」『岐阜大學留學生センター紀要2000』岐阜大學留學生センター, pp.64-75, 岐阜大學留學生センター

日比谷茂男・日比谷潤子(1988)『外國人のための日本語 例文・問題シリーズ16 談話の構造』荒竹出版

平高史也(1991)「日本語學習者の發話における時間概念の表現」*The Language Teacher* XV:10, pp.5-8, The Japan Association of Language Teachers

牧野成一(1999)『日本語改訂版ACTFLOPI試驗官養成用マニュアル』アルク

増田眞理子(2000)「談話展開に關わる接續形式とそれに變わる連體修飾節の使用について－日本語學習者

と母語話者が産出したテキストの比較から」『平成12年度日本語教育學會春季大會豫稿集』(編) 日本語教育學會大會委員會, pp.51-56, 日本語教育學會
森田良行(1989)『基礎日本語辭典』角川書店
マイケル・マッカーシー (1995) 『語學教師のための談話分析』安藤貞雄・加藤克美譯, 大修館書店
[Michael McCarthy(1992) *Discourse Analysis for Language Teachers*, Cambridge Language Teaching Library, CUP]
横林宙世・下村彰子(1988)『外國人のための日本語 例文・問題シリーズ16 談話の構造』荒竹出版

Acquisition Study of Expressions to Maintain Cohesion
– A Case Study of Two Trainees in a Japanese Company –

Hakamata, Mari

<Abstract>

The purpose of this study is to clarify the use of expressions to maintain cohesion in their speech. The examinees are two trainees (SS, RR) trained in a company in Shizuoka prefecture for one year. Three Oral Proficiency Interviews (OPI) were conducted during their training period, the first-month, seventh-month, and twelfth-month. The interviews recorded each time were used as a date for analysis.

The result is as follows: there is no evidence to use expressions to maintain cohesion in RRs first interview. RR has not learned Japanese before coming to Japan. But the second interview shows that RR can use a lot of kinds of conjunctions. SS who has learned Japanese before coming to Japan also uses conjunctions in the interviews. These expressions are useful to maintain cohesion in their speech when the learners have not acquired proficiency to product a long discourse.

From these results, it can be said that these two trainees attempted to maintain cohesion in their speech consciously with their limited Japanese oral proficiency.

<Keywords> trainees, novice level learners, OPI, cohesion, conjunctions

論文タイトル：發話の結束性を持たせる表現の習得―技術研修生の接續詞習得の過程から―
Acquisition Study of Expressions to Maintain Cohesion – A Case Study of Two Trainees in a Japanese Company –

筆者名：袴田麻里
Hakamata, Mari

勤務先:靜岡大學留學生センター

專攻:日本語教育，第二言語習得

住所:靜岡縣浜松市城北3－5－1

電話番號 ：053－478－1675

E－mail：kmhakam@ipc.shizuoka.ac.jp

口頭發表した場所，發表日：大田大學校，2002年4月27日

投稿日 ：2002年7月29日

KCI